

現代の ことば

川瀬

慈

神様は機械の職人
神様の機械は下手である
職人につれてほめていく

無拍子で、ほとほと語りだ
近い『セブセンニヤ』神にさ
さげる歌』。

アスマリの少年タガフと
は、エチオピア北部の都市ゴ
ンダールにおいて出会った。
アスマリは、ヤギの皮を張っ
た共鳴筒と馬の尻尾の毛を束
ねた弦からなる弦楽器マミン

「を奏しながら歌う職能集団
である。エチオピアには、音
楽才能をなむわいと云える職能
者の集団がいくつ也存在す
る。アスマリは、王侯貴族に仕
える宮廷楽師、道化師、政治的
な扇動者、社会批評家として
庶民の意見の代弁者として、
権力によりそい、時には抗
し、古くから社会的に広い範
囲で活動を行ってきた。
タガフが演奏をはじめると、
際必ず一番最初に歌う歌が、

神にささげる歌



冒頭の『神にささげる歌だ。
彼は酒場から酒場を歌い歩
く。酔っ払いに絡まれよう
が、客に無視されようが、歌
いかける相手の外見上の特徴
をうまくとらえたほめ歌を歌
う。タガフのほめ歌を聴く客
たちが徐々に上機嫌になり、
どんなにその場が盛り上がっ
ても、当の本人は顔にしわを
よせ、無愛想な表情のまま歌
い続ける。
アスマリの口癖は決して楽

ではない。楽器を背負って街
をさまよふタガフに対して、
時には容赦ない罵声が投げか
けられる。アスマリは古くか
ら、鍛冶屋、皮なめし職人、
機械師等とともに、モヤテン
ニヤ（職能者）" という範疇
に入れられ蔑視されてきた。
国際的なスターが活躍する現
在も、北部では特にこの傾向
が強い。せつかく客をなむけ
ても、演奏技術の拙い子供の
アスマリに、多くのチップが
払われることは珍しい。縄張
り意識の強い大人のアスマリ
たちと鉢合わせようものな
ら、たかだか10代なかばのタ
ガフは酒場から追い払われて
しまうのである。それでも決
してあきらめることなく、演

奏の機会を求めて夜のコンタ
ールをくまなく歩き回るタガ
フに、私は孤高の野武士のイ
メージを重ね合わせていた。
「神様は機械の職人」神様
の機械は下手である、職人
につれてほめていく」。数
行の短い詩のまとまりが連な
る『神にささげる歌』には、
生のはかなさ、ひいては諸行
無常を説くメッセージや、驕
り高ぶるものを強く戒める警
句がちりばめられている。

ここでは機械師が、神によ
る（人の）創造に喩えら
れる。神は次々に人をつくる
（職人）が、同時に、以前つ
くられた人々も次々に亡くな
る（ほとほと）。この詩は、
（国立民族学博物館助教、映
像人類学・アフリカ研究）